

アジア時報

長い間、アジア調査会の研究部門であるアジア研究委員会の代表幹事を務められた国際政治学者の永井陽之助氏が昨年暮れ亡くなられた。永井氏をしのび、現・代表幹事の中嶋嶺雄氏が書かれた哀悼文（毎日新聞4月1日朝刊に掲載）を転載する。

永井陽之助氏をしのぶ

平和論過剰の言論界に挑戦した現実主義者 長年アジ研の代表幹事つとめる



故 永井陽之助氏

ン、スタンレー・ホフマンにいたる知的系譜、研ぎ澄まされた文章と挑発的なレトリック、まさにわが国二十世紀知識人の最も優れた到達点を示し続けた国際政治学の永井陽

文学、哲学から物理学や精神医学にいたる豊饒な学識、坂口安吾や丸山真男、E・フロム、ハンナ・アーレント、エリック・ホフファーからD・リースマ



国際教養大学理事長・学長

中嶋 嶺雄

之助氏は、昨年末に逝去されていた。大きな喪失である。私個人にとっても永井先生はかけがえのない存在であった。私の著書を引用されたからと名著『平和の代償』（中央公論社）を署名入りで贈ってくださいだったので一九六七年初頭だったので、もう四〇年以上も前のことになる。同書は、氏が在米中に出会った一九六二年のキューバ危機に強

〈アジア研究委員会における永井先生の報告〉

| | | | | |
|--------------|---------------------|----------|-------|---------------|
| 1968年 5月 25日 | 「ベトナム以後と中国」 | 東京工業大学教授 | 永井陽之助 | 中国研究報告1 |
| 1969年11月25日 | 「米アジア政策の転換とその政治的背景」 | 東京工業大学教授 | 永井陽之助 | アジア・クォーター-2-1 |
| 1972年 1月 25日 | 「日中交渉の論理とその国際的背景」 | 東京工業大学教授 | 永井陽之助 | |
| 1974年 6月 25日 | 「国際環境の構造変化とアジア(総論)」 | 東京工業大学教授 | 永井陽之助 | 1974年8月号 |
| 1976年 5月 25日 | 「テントのアメリカ国内条件」 | 東京工業大学教授 | 永井陽之助 | 1976年7月号 |
| 1979年 3月 26日 | 「アジアの新情勢と日本外交」 | 東京工業大学教授 | 永井陽之助 | 1979年5月号 |
| 1980年 5月 28日 | 「新段階の米ソ関係」 | 東京工業大学教授 | 永井陽之助 | 1980年8月号 |
| 1983年10月27日 | 「米国から見た日本の防衛論争」 | 東京工業大学教授 | 永井陽之助 | |
| 1985年 6月 25日 | 「SDIとアジアの安全保障」 | 青山学院大学教授 | 永井陽之助 | 1985年10月号 |
| 1988年 2月 25日 | 「米ソ新テントの進展とその代償」 | 青山学院大学教授 | 永井陽之助 | 1988年5月号 |
| 1990年 3月 23日 | 「冷戦は終わったか」 | 青山学院大学教授 | 永井陽之助 | 1990年6月号 |

い衝撃を受け、朝鮮戦争からベトナム戦争までを見据えて、核時代の日本外交の拘束と選択の有様を示した力作であった。平和論過剰のわが国の言論界にいわば現実主義の立場から切り込んだ挑戦である。

私が永井氏に最初にお会いしたのは、一九六七年春、日米知識人会議への出席を松本重治氏から要請された、国際文化会館での準備会のときであった。ウイリアムズバーグで開かれたこの会議は、日本側が笠信太郎、桑原武夫、永井道雄、加藤周一、坂本義和の各氏ら、米側がD・リースマン、E・ライシャワー、ダニエル・ベル、スタンレ

アジア研究委員会をリード

自身も11回の研究報告

昨年暮れ亡くなられた永井陽之助氏は、アジア調査会にとつて切っても切れない「恩人」である。アジア調査会草創期の1966年10月にアジア研究委員会に入られ、2005年5月に体調がすぐれず、委員を辞退されるまで40年近く研究委員を務められ、中嶋嶺雄氏とともに長い間幹事として研究委員会をリードされた。この間、ご自身も、記録に残っているだけでも上の表のように11回にわたって調査・研究結果を報告されている。タイトルが示すようにその時々の最も重要、かつ緊急な課題を取り上げられ、時に鋭い批判を加えたり、提言をされている。

(編集部)

1・ホフマン、R・スカラビーノ各氏らの錚々たる面々で、中国の文化大革命とベトナム戦争がテーマであった。この会議では私が最年少かつ最初の訪米だったので、会議の後に永井氏とワシントンDCやハーバード大学へ一緒に送らせていただいた。

中国の文化大革命の余波は、まもなくわが国の大学紛争へと連なっていた。東大の安田講堂落城が注目されたけれど、実は東京教育大と東京外大の紛争も深刻で、やがて東京工業大へも波及していった。私は東外大の教授会代表委員として過激派学生と対決せざるを得なかったが、永井氏も東工大で人社系を代表する立場にあり、私の東外大での経験を東工大で講演したこともあった。この学園紛争を国際的視野で論じた書が「柔構造社会と暴力」(中公叢書)である。同じ中公叢書にはキッシンジャー外交や日中友好外交を批判的に論じた「多極世界の構造」、政治的資源としての「時間」を「非対称紛争」としてのベトナム戦争に当てはめて論じた「時間の政治学」がある。

こうした旺盛な言論活動のなかでの学術的貢献が、永井主査による文部省科学研究費特定研究「国際環境の基礎的研究」であった。この共同研究は、国際的な冷戦研究として注目を集め、京都シンポジウムには世界第一線の学者が集まった。その成果が英文ではコロンビア大学出版会から出され、わが国では永井著「冷戦の起源」などの「叢書

国際環境」(中央公論社)となり、永井氏は日本国際政治学会理事長にも就任された。

当初は現実主義の立場から理想主義者の平和・安全保障論を鋭く批判した永井氏だったが、言論や政治に軍事優先傾向が強まるなかで氏は、主に岡崎久彦氏との論戦を意識して防衛論を「文藝春秋」に一年間連載、八四年度文春読者賞を得ている。

永井氏の一九八五年の東工大最終講義を巻頭にした「二十世紀の遺産」(文藝春秋)は、粕谷一希氏と私もお手伝いした浩潮(はうしゅう)な編著であり、氏の人脈の広さを物語っている。そこに登場する高坂正堯氏も江藤淳氏もすでに亡く、神谷不二氏もつい最近永井氏の後を追って急逝された。これらの方々には、佐藤栄作政権の時代以降、首席秘書官・楠田實氏のもとで日中関係や日米関係の方策を永井氏とともに提言した論客でもあった。永井氏が論じた軽武装・日米同盟重視の「吉田ドクトリンは永遠なれ」との見解が一部で誤読されてもいる昨今だけに、氏の一貫した警告を忘れてはなるまい。

なお永井氏は毎日新聞社アジア調査会アジア研究委員会の代表幹事としても貢献された。



国際政治学者、永井陽之助氏は昨年12月30日死去。84歳。

アジア時報

2009. 5



The Asian Affairs Research Council

アジア研究委員会

「ロシアにおける経済危機と政治情勢」

袴田茂樹

講演会

「東アジアの未来と韓日の役割」

権 哲賢

レポート

「タイ政局混乱」

西尾英之

永井陽之助氏をしのぶ

「平和論過剰の言論界に挑戦した現実主義者」

中嶋嶺雄